

## 「小さな平和から」

ヨハネの手紙一 4：19-21

私たちは、だれもが平和に過ごしたいと願っているはずですが。先の世界大戦が終わった時、誰もがもう戦争はしたくないと思ったことでしょう。けれども、今も世界から争いが絶えたことはありません。なぜなら人間は、どうしても自分を中心に物事を考えてしまうからです。戦争とは人間の考える正義と正義のぶつかり合いです。しかし、その人間の正義は“絶対”ではないのです。残念ながら、すべての人にとって“正しい”答えを出すことは、人間にはほぼ不可能です。しかし、私たちは、唯一の“正しい”基準を知ることができます。それは聖書の御言葉です。

人は、神さまのかたちに似せて創られました。それは“神さまと向かい合って、神さまと対話ができる者として”創られたということです。それなのに、人間は神さまと向かい合うどころか、神さまに背を向けることが自然になっています。神さまはこの罪を決して見逃すことはされません。しかし、神さまは、イエスさまの命と引き換えに私たちを赦してくださったのです。ですから、私たちの命は尊いのです。人間の尊さは、神さまが保証してくださったのです。だから、絶対に揺るがない尊厳なのです。それゆえ、その尊い命を奪うことは、絶対に許されないことなのです。

人は創造主なる神さまに背いたことによって、神さまが創られた世界を平和のない地にしてしまいました。けれども、人間に対する神さまの愛は変わることはありません。この地を再び祝福し、平和を回復させるために御子イエス・キリストを「平和の君」(イザヤ9:5-6)として遣わされたのです。イエスさまは十字架の死に至るまで神さまの御心に従われました。そして、三日後に復活された主が弟子たちに言われた最初の言葉は、「あなたがたに平和があるように」(ヨハネ 20：19)でした。つまり、イエス・キリストがまことの愛をもって私たちを愛されたのは、平和を与えるためでした。

このキリストの愛は、私たちに注がれてそれで終わり、ではありません。私たちに注がれた愛は、私たちの中からも溢れ出し、周りの者に向かって注がれていくのです。イエスさまは、ある律法学者から「律法の中で一番大切な掟は何ですか」と質問された時、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい…隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ 22：37-39)と答えられました。このイエスさまの教えを受けたヨハネも、手紙の中でこう語ります。「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」(19節)と。

これにいくつか言葉を補うと、「わたしたちが“隣人を”愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださり、“わたしたちがそれに応えて、神を愛する”からです。」となります。すなわち、イエス・キリストによって私たちは神の愛を受け、神の愛を知りま

す。そしてキリストの愛を知ったゆえに、私たちは愛に生きられるのです。けれども、現実の形では、私たちの愛は不完全であるかもしれません。神さまを愛すると言いな  
がらも御言葉に従うことが出来ない、隣人を許すことが出来ない、愛の何たるかを知  
ってはいても実行出来ない。そんなもどかしさに捉われることもあるでしょう。

しかし、そのような不完全な愛であったとしても、神さまが認めてくださるのです。  
ですから、私たちが“自分の力によって”愛することが出来るかではなく、私たちを愛  
しておられる神さまの愛のゆえに、私たちの内に愛が働くのです。だからこそ、私た  
ちは神を愛し、隣人を愛するのです。

イエスさまが言われる隣人とは、会ったこともないような不特定多数のことではあ  
りません。自分のすぐ近くにおいて、自分と関わりのある人のことなのです。その人を  
大切にすること、尊厳を守ること、それが平和の第一歩となるのです。

イエス・キリストは「平和を実現する人々は、幸いである」(マタイ5:9)と言われ  
ました。私たちには大きな平和は作り出せません。そんなに大きな力はありません。  
しかし、一人一人が自分と関わりのある人たちと小さな平和を作り出していったら、  
それは大きな平和につながるのではないのでしょうか。